ISSN 0918-1385

THE ROOF

郡山市立美術館ニュース ザ・ルーフ
2015.6.11 Vol.46

NHKの朝ドラ『マッサン』の主人公のモデルでニッカウィスキーの創始者である竹鶴政孝が心血を注いでつくりあげた日本最初の高級ウィスキー「スーパーニッカ」。

そのボトルをデザインしたのは郡山市出身の佐藤潤四郎でした。

郡山市立美術館では佐藤潤四郎の作品をコレクションの大きな柱の一つとして、開館前から収集に努めてきましたが、このたび新たにその仲間が加わりました。

《オブジェ・羊車(鍛鉄)》
金工(鍛鉄)
高さ20.9×幅17.2×奥行10.4㎝
大方竜子氏寄贈
※平成26年度新収蔵品

《オブジェ・ガラスを吹く人》
金工(鍛鉄)　高さ15.0×幅5.0×奥行11.1㎝、高さ13.0×幅4.1×奥行9.5cm
大方竜子氏寄贈
※平成26年度新収蔵品

《アイスクリーム皿》
ガラス／宙吹き
高さ8.3×幅10.4㎝
大方竜子氏寄贈
※平成26年度新収蔵品

《タンブラー(スモークグラス)》(2点組)
ガラス／型吹き
高さ10.0×幅6.0㎝(2点共)
※平成26年度新収蔵品

《アイスクリーム皿》はこれまでのコレクションになかった用途の作品です。ふたつで一組の《タンブラー》、その淡褐色の肌合いはなんとなく温もりを感じさせます。

また、佐藤潤四郎はもともと金工作家でとくに鍛鉄を専門にしていました。新しい収蔵品にも鉄の作品があります。《羊車》に《ガラスを吹く人》、ともに佐藤潤四郎のキャラクターです。

(当館学芸課長　鈴木誠一)

《「スーパーニッカ」手吹きボトル》佐藤潤四郎デザイン／カガミクリスタル制作 1962(昭和37)年頃
ガラス／宙吹 25.0×14.0cm 川崎清氏寄贈 当館蔵

大阪・千里万博公園内にある国立民族学博物館（みんぱく）は、世界各地の民族資料約34万点を収蔵する、日本を代表する博物館です。今回の展覧会では、みんぱくの膨大なコレクションの中から、選りすぐられた造形物約360点を紹介します。本展は、歴史上人間が生み出した様々な「イメージ」に着目しています。イメージのつくり方や受けとめ方に、人類共通の普遍性はあるのでしょうか。実際に資料を展示し、見て体感することで、その答えを探ってみようという試みです。そのため本展では、世界各地の神像や仮面をはじめ、民族衣装、墓標、玩具などの資料を、分類というよりもイメージに備わる造形性や効果、機能などに着目し、章立てています。その一部をご紹介しましょう。

プロローグ　視線のありか

会場に入って最初にご覧いただくのは、世界各地から集められた仮面の数々です。その圧倒的な視線の力を体感してください。

仮面「キフェベ」　民族／ルバ
国名／コンゴ民主共和国

第一章　見えないもののイメージの力

神々や精霊、物語 ― 人びとは世界中で目に見えないものを視覚化し、定着させようとしてきました。様々な神像や図像などから、造形物に込められた人間の意志や願いを探ります。

《トコペイ人形》地域／トビ島
国名／パラオ

The Power of Images

イメージの力

国立民族学博物館コレクションにさぐる

神像つきの椅子「カワ・トゥギトゥ」
民族／イアトムル　国名／パプアニューギニア

第二章　イメージの力学

光輝くもの、色鮮やかなもの、高さを強調したものは、古来より人びとの眼を引き付け、聖なるものや富の象徴として効果的に造形化されてきました。光と色、高みをテーマに、各地の衣装や装身具、墓標などを展示します。

会 期：平成27年６月27日（土）～８月23日（日）

会　場：郡山市立美術館
時　間：午前９時30分～午後５時（入館は午後４時30分まで）
休館日：毎週月曜日（７月20日（祝・月）は開館、翌日休館）
観覧料：一般800（640）円　高校・大学生500（400）円
※（　）内は20名以上の団体料金。
中学生以下、65歳以上、障がい者手帳をお持ちの方は無料。
主　催：郡山市立美術館　国立民族学博物館　千里文化財団
企　画：国立民族学博物館　国立新美術館　日本文化人類学会
助　成：日本万国博覧会記念基金（公益財団法人 関西・大阪21世紀協会）

関連イベント

●講演会　会場：多目的スタジオ
共催：国立民族学博物館友の会

・「イメージの力 ～みんぱくのコレクションが語るもの」
講師：吉田憲司さん（国立民族学博物館副館長）
日時：８月８日（土）午後２時～

・「光と色が放つイメージ」
講師：上羽陽子さん（国立民族学博物館准教授）
日時：７月４日（土）午後２時～

●ギャラリートーク　会場：企画展示室（要観覧券）
講師：当館学芸員
日時：８月22日（土）午後２時～

●映画会　会場：多目的スタジオ

・『キリクと魔女』
（71分、1998年、監督：ミッシェル・オスロ）
日時：６月28日（日）午後２時～

・『アフリカ物語』
（114分、1980年、監督：羽仁進）
日時：８月16日（日）午後２時～

●ワークショップ
※申込方法及び定員等は最終頁をご覧ください。

・季節を染める ―葛（くず）―
夏草を代表する葛を材料にスカーフなどを染めます。
講師：佐治ゆかり（当館館長）
日時：７月５日（日）午前10時～

・野外彫刻を作ろう
韓国の民族造形「ソッテ（鳥竿）」をヒントに木彫を作り、美術館前庭に展示します。
講師：関根秀樹さん
（和光大学講師・古代技術・民族文化史研究家）
日時：７月18日（土）午前10時～

・民族楽器とサウンドオブジェを作ろう
スピリッツキャッチャー（うなり木）など木や竹を素材に民族楽器を作ります。
講師：関根秀樹さん
日時：８月９日（日）午前10時～

ゾウの仮面「ムバップ・ムテン」
民族／バミレケ
国名／カメルーン

第三章　イメージとたわむれる

ここでは、つくり手の遊び心に焦点を当てた造形物を展示します。アップリケが施された前掛け布やブラウス、ヒョウタンのオブジェ、イースターエッグなど、作り手たちの造形意識の高さと心躍るようなセンスをご覧ください。

ブラウス「モラ」　民族／クナ
国名／パナマ

第四章　イメージの翻訳

ライオンの形をした棺桶!?空き缶が玩具に…ひとやモノ、情報が行き交う中で生み出された新しいイメージや、商品化されるイメージに着目します。

《棺桶（ライオン）》パー・ジョー 地域／テシ
国名／ガーナ

エピローグ　見出されたイメージ

展覧会の終章では、実用のための道具などを、あえて現代美術の展示手法を用いた空間でご覧いただきます。一体なぜ…？ぜひ、会場でたしかめてください。

人間はじつに多種多様なイメージを生み出してきました。会場ではまず、その満ちあふれる力を理屈抜きで体感していただければと思います。きっと、新たな驚きや楽しさを発見できるはずです。

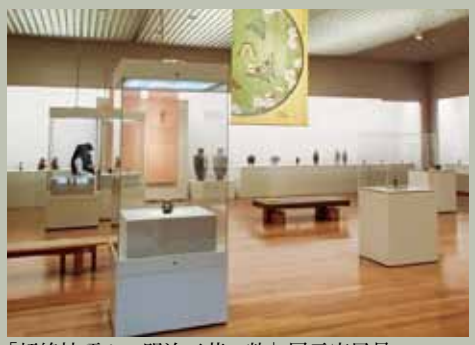
（当館主任学芸員　杉原　聡）

超絶技巧！明治工芸の粋（すい）

明治初期、日本で制作されていた工芸品は欧米でたいへんな人気を誇り、明治政府は殖産興業政策のもと、たくさんの工芸品を職人たちに作らせ、輸出を推進していました。

本展では、村田理如（まさゆき）氏の収集による京都・清水三年坂美術館の所蔵品のうち、並河靖之、涛川惣助というふたりの「ナミカワ」らの七宝、正阿弥勝義らの粋（いき）な遊び心を感じさせる金工、白山松哉の繊細な蒔絵、西洋画家としてもその才能を発揮した柴田是真らの印籠、象牙に彫られた実物と見紛うばかりの安藤緑山の野菜など、驚くべき技工が凝らされた工芸品が展示されています。実際に動くように作られた鉄製の蛇や虫などの自在に、気が遠くなりそうなほどに細密な絵付けがされた陶芸の薩摩などに加え、保存が非常に困難な刺繍による絵画もたいへんな魅力を放っています。これらは近年海外から買い戻された、これまで国内ではほとんど未紹介のものばかりです。

本展は１万点を超える清水三年坂美術館所蔵品の中から選りすぐりの約160点を紹介しています。東北で唯一開催される貴重な機会。明治人たちの知られざる驚愕の技の数々をどうぞお楽しみください。



「超絶技巧！　明治工芸の粋」展示室風景

会　　期：平成27年４月21日（火）～６月14日（日）
休 館 日：毎週月曜日
（５月４日（月・祝）は開館、５月７日（木）休館）
観 覧 料：一　般　　1,000（800）円
高校・大学生　500（400）円
※（　）内は20名以上の団体料金。中学生以下、65歳以上、障がい者手帳をお持ちの方は無料。
主　　催：郡山市立美術館
協　　力：清水三年坂美術館
監　　修：山下裕二（明治学院大学教授）
企画協力：広瀬麻美（浅野研究所）

サントリー東日本大震災復興支援プロジェクト

サントリー美術館所蔵品展

会　期　平成27年9月5日(土)～10月18日(日)
時　間　午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日　毎週月曜日(9月21日は開館、24日休館。10月12日は開館、翌日休館)
観覧料　一般1000(800)円　高校・大学生500(400)円
※(　)内は20名以上の団体料金。中学生以下、65歳以上、障がい者手帳をお持ちの方は無料。
期間中展示替えがあります。前期：9月5日(土)～27日(日)　後期：9月29日(火)～10月18日(日)

サントリー美術館は、1961(昭和36)年に開館して以来、「生活の中の美」を基本理念としてコレクションを形成しています。本展覧会では、人々の生活や古典文学の世界を表した近世絵画、鍋島焼や伊万里焼などの重要文化財2点を含めた陶磁器、外国の技術を取り入れつつも日本独自の美しさを備えたガラス器など、約60点が出品されます。

図1《薩摩切子　藍色被船形鉢》19世紀中頃

《薩摩切子　藍色被船形鉢》(図1)は、吉祥文である羽を広げた蝙蝠を正面に、後方には陰陽を示す巴文を配した船形の鉢です。盃洗用と言われていますが、箱書きに「お菓子入れ」とあり、茶道具としても使われていたと推測されます。使い手の好みによって、様々な用途でその生活に取り入れられていたのでしょう。

《江戸切子　文具揃》(図2)は江戸時代から明治時代の初めまで販売されていた文具セットです。この中の文鎮にも蝙蝠の姿が使われており、人々が身の回りの品に込めた思いが感じられます。

図2《江戸切子　文具揃》江戸時代

《洛中洛外図屏風》(図3、4)のような屏風も、間仕切りや風よけとしての機能を持つ調度品のひとつでした。京都市内と郊外を描いた洛中洛外図は、居ながらにして京の都の全容を楽しむことができ、室町時代から江戸時代にかけて人気を誇った主題です。図3、4は後水尾天皇の二条城行幸の様子で、図3は先触れの二条城到着、図4は天皇の御所出発の場面です。その周囲にはあらゆる人々の生き生きとした生活の様子、さらに私たちにも馴染み深い神社仏閣が描かれています。

実物を見るだけでは気付きにくい部分もあるかもしれませんが、今回併設されるデジタル展示のタッチパネルを操作して隅々まで拡大することができます。ところどころ解説も出てきますので、作品理解の助けになってくれるでしょう。デジタル展示は《洛中洛外図屏風》と《鼠草子絵巻》の2点が展示されます。作品と合わせてお楽しみください。

近世の人々の生活を彩ってきた美しい品々がこぞって出品されますので、日本人の生活に根差していた高い美意識をご堪能いただければと思います。

(当館学芸員　田中有沙子)

図3　伝土佐光高《洛中洛外図屏風》17世紀(左隻・部分)

図4　伝土佐光高《洛中洛外図屏風》17世紀(右隻・部分)

平成26年度寄贈作品報告

平成26年度の寄贈作品を報告します。表紙でも紹介した佐藤潤四郎、日本のシュルレアリスムを代表する洋画家高山良策の油彩画、郡山市出身の鎌田正蔵や、いわき市出身の若松光一郎らと美校時代に「貌」というグループを作っていた杉原正巳、そして今年百歳を迎えた郡山市出身の彫刻家佐藤静司氏の貴重な作品が、新たに当館コレクションに加わりました。常設展示室で随時展示されます。

- 佐藤潤四郎《アイスクリーム皿》等ガラス作品1点、金工3点、陶器10点、石彫1点、素描7点　合計22点
- 大方竜子氏寄贈(表紙参照)
- 高山良策《こども》油彩画1点
- 西村祐次氏寄贈
- 杉原正巳《愛書票》等木版画3点
- 吉留直輝氏寄贈
- 佐藤静司《十二支》(全12点揃)木彫1組
- 小針健治氏寄贈

杉原正巳《愛書票》
1943(昭和18)年
木版・紙 7.8×5.7㎝

高山良策《こども》1954(昭和29)年
油彩・キャンバス　91.5×73.9㎝

佐藤静司《未》
(「十二支」より)
1997(平成9)年
木 10.0×21.3×15.3㎝

「判じ絵」ニュー・ウェーヴ
HANJI-E New Wave

―「大判じ絵展」での特別展示―

当館では、企画展「大判じ絵展」（会期：平成26年11月1日～12月21日）を開催しました。「判じ絵」とは、江戸時代に庶民のあいだで流行した、現代でいう「なぞなぞ」のようなものです。判じ絵を見る楽しみは、描かれたお題を解読できたときの達成感はもちろんのこと、当時の生活や娯楽を知ることができる点にもあります。

今を生きる若者が判じ絵を描いたら、どんなものが生まれるのだろう、という想いから企画されたのが、「HANJI-E, New Wave」です。このイベントのために、国際アート&デザイン専門学校イラストレーション科の学生の皆さんが作品を制作してくれました。

判じ絵を制作してもらうために、「大判じ絵展」担当者は、事前に学校に赴き、判じ絵について説明しました。お題は自由であることも伝えました。

すると、1か月もたたないうちに9人の学生が合計27点の判じ絵を制作してくれました。判じ絵のお題は、好きな歌手や女優、食べ物などいろいろですが、どれもフレッシュな作品ばかりです。

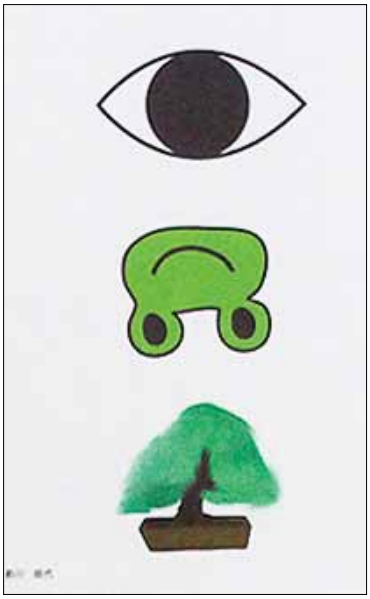


図1

さて、図1の判じ絵は、どう判じますか？「かえる」がひっくり「かえる」のがポイントです。絵柄をひっくり返して、逆さまに読ませるのは、江戸時代の判じ絵にもよく出る手法です。ただし、「るえか」と読んでも判じることはできませんよ。図2は、絵柄の半分を切ることで、文字も半分に読ませるという、これまた当時の判じ絵でよく使われた技を用いています。

どれもユニークな判じ絵ばかりですが、ことのほか、来館者の心を動かしたことがあります。それは、お題に福島県の地名が多く使われていたことです。いわき、小名浜、浪江…。震災を経験した若者たちのふるさとへの強い想いが作品にこめられていたのです。

今回、好評のうちにこの特別展示は終了しましたが、ご覧いただいた方々も「判じ絵」の楽しさは時代を越えるものだと実感できたことでしょう。

図2

※この展示を実施するにあたり、国際アート&デザイン専門学校の佐藤日和様、星昌宏様にはたいへんお世話になりました。記してお礼申し上げます。

（当館学芸員　富岡進一）

［こたえ　図1：会津若松、（前川佳代さん制作）、図2：ハナゾウイヌ、（藤岡瞳さん制作）］

舟越保武作《萩原朔太郎像》について

萩原朔美（多摩美術大学教授）

舟越保武《萩原朔太郎像》1955（昭和30）年
ブロンズ 岩手県立美術館蔵　撮影：大谷一郎

小学生だった私が家に帰ると、最初に出迎えてくれるのが、ブロンズの朔太郎像だった。

ブロンズは、自分の部屋へ行くために通る応接間に置いてあった。前を横切る時いつも緊張した。いたずらは許さないぞ、と言っているかのような表情に思えたのだ。

対照的に、愛らしく微笑んでいる少女の絵が玄関に飾ってあった。舟越さんの色紙に描かれた絵だ。だからわたしのこども時代は、毎日舟越さんの作品によって、見張られたり、見守られたりして過ごしたのである。

母親は晩年、朔太郎像を玄関近くの小窓の下に移動させた。

「家を守ってもらうの」などと言っていた。

確かに見方によったら、あたりを睥睨（へいげい）しているように見えなくもない。

この朔太郎像の制作過程が写真で残っている。母親が撮影したのだろう。それを見ると、最初はずい分表情が温和だ。舟越さんの描く異国の女性みたいな雰囲気である。優しく人当たりがよさそうな人物だ。それが段々に苦悩を帯びた人間になってくる。

大きく変化したのは額と頬と口だ。

額は髪の毛を後退させて広くみせ、苛立ちをみせているかのような皺が加えられている。

頬はどんどんそぎ落とされている。頬骨がはっきりと浮かび上がる。これによって、明らかに年齢が積み重ねられた。最初の像が30代くらいだとすると、50代にはなった感じである。

唇は両端が下に引き伸ばされて、意識して喋るまいとでもしているようだ。

石彫は削り落として行くけれど、粘土は加えていくものだと思っていた。しかし朔太郎像は石彫のように引き算で成立させたものだったのだ。

その制作プロセスの写真のなかに、母親と像とが並んで映っているものが一枚ある。顔の角度が同じなので思わず笑いがこみあげてくる。輪郭がよく似ているのである。写真を参考にして像は作られたのだけれど、もしかして舟越さんは母親の顔もこっそり参考にしたのではないか。そんなことを想像するとおかしくなってしまうのだ。

朔太郎像について、私には二つの解けない謎がある。

一つは支持体の色だ。美術館やカタログに掲載されているブロンズ像は黒い石である。

ところが、家にあったものは真っ白い大理石なのだ。黒いブロンズに黒い台座、という組み合わせだと緊張感が出ていい。何故家のものは白なのか。

もう一つは、上から見る像のように感じられるところだ。たとえば下から鑑賞すると首が無いから窮屈だ。上から見ると安定する。どうして鑑賞者の位置を上げたのだろうか。朔太郎像の三年後、下から見上げる長崎二十六聖人の制作が開始される。それと関連付けると謎が面白くなるのである。

《萩原朔太郎像》制作途中の塑像
（萩原朔美氏提供）

制作途中の《萩原朔太郎像》と萩原朔美氏の母、萩原葉子氏（萩原朔美氏提供）

舟越保武彫刻展（平成27年1月24日～3月22日）講演会
「舟越保武と祖父・萩原朔太郎の像について」
講師：萩原朔美さん
日時：平成27年2月1日
会場：多目的スタジオ

※舟越保武彫刻展は練馬区立美術館でも開催（7月12日～9月6日）

行事報告

講演会　なぞなぞ絵解　判じ絵の世界

講　師：岩崎均史さん
（練馬区立石神井公園ふるさと文化館長）
開催日：平成26年11月2日
会　場：多目的スタジオ

同音異義語の多い日本語の特性を生かし、言葉の意味とはまったく関係のない図柄の組み合わせによって表された判じ絵。なぞなぞのように読み解きながら、遊び心の詰まった図柄を楽しみました。例を見て熱心に判じたり、答えを聞いて笑ったりと、判じ絵の世界に引き込まれる内容でした。

第7回風土記の空　郡山市内の中学校美術部・選択美術による作品展

開催日：平成26年11月11日～12月21日
会　場：美術館ロビー

美術部活動や選択美術などにおいて制作した作品を美術館内に展示し、中学生の展示体験も実施しました。

参加校
明健中学校
郡山第四中学校
郡山第五中学校
緑ヶ丘中学校
西田中学校
（計5校）

「石に刻もう」

野地庄一（彫刻家）

講師：野地庄一さん

学生の頃、構内で大学職員に声を掛けられた。「石彫の方ですよね。最近は、音校の学生の中にも音楽関係以外の求人を探しに来る学生がいます。彫刻の人は学生課にはほとんど来ませんが、卒業後はどうされているのですか。」「半数は行方不明になります。」冗談のつもりだったが、その人は「そうなんですか。」と、寂しそうな顔をして去っていった。これが一般的な彫刻家のイメージなのだと、その時、思った。しかし、彫刻制作は生活の糧になりにくい分、精神的により深いところまで導いてくれる、優れた乗り物である。

今回の石彫ワークショップの企画は当初、受講生が集まるだろうかと担当の方も心配された。自分も同じ思いであった。普通に考えれば、汚れるし、手間暇かかるし、体力もいる。やり直しも効かないし、危険も伴うし、孤独な作業でもある。ところが、先着10名の枠は、申込み開始後約1時間で埋まってしまった。驚くと同時に、合点のいく思いもあった。私は受講生の意識の高さに畏敬の念を覚えた。

ワークショップのお題は「自刻像」とした。人の顔を造るのはおもしろい。受講生の方には、顔のデッサンか写真、または鏡の準備を依頼した。できた形が自分に似ているかどうかではなく、石と向き合い自己と対峙することで生まれてくるものは、まぎれもなく「自刻像」になりますと説明した。材料は群馬県産の多胡石という砂岩。大理石用のヤスリ、ノミ、刃トンボ、石頭（鉄製のハンマー）の代わりに金槌を使えば、初めての人でもなんとか彫り進めることができる硬さの石である。危険を避けるために頭部には帽子やバンダナ、防塵メガネ、マスク、軍手を着けてもらい、簡単な説明の後、いよいよ作業を開始した。次第にノミの音も大きくなり、石の粉がアトリエに充満し始めた。防塵メガネが汗で曇り、作業環境が過酷さを増すなかで、試行錯誤をしながらも少しずつ石との対話が深まっていった。制作の途中で、舟越展に繰り返し足を運び、その度に発見した新たな感動を伝えてくれる方もいた。石という大自然を象徴する「物」を通してこそ得られるに違いない何物かを信じ、そのことを確かめようと何度も五感を研ぎ澄ます姿があった。

石の中心に向かって一定のリズムでノミを立て続けるうちに、我々の内側にある人間性を超えた大らかな時間が解き放たれ、人間と地球の間の本来的な関係が呼び覚まされていくのではないのだろうか。これこそが石彫の大きな魅力の一つであると思う。

条件が整えば、石彫の作品は今後何千年、何万年と我々の精神的な営為を伝えてくれるタイムマシンとなり、存在し続けるであろう。それは作家に対するご褒美であり、また次に続く祝福された試練でもあるのだと思う。

受講生の皆様、2日間大変お疲れさまでした。

舟越保武彫刻展ワークショップ「石に刻もう」
講師：野地庄一さん
日時：平成27年3月14日、15日
会場：創作スタジオ

ワークショップ 初心者のための伝統木版画講座

講　師：木下泰嘉さん（版画家）
開催日：平成26年12月13日、14日、20日、21日
会　場：創作スタジオ

企画展「大判じ絵展」の会期中、伝統木版画のワークショップを開催しました。浮世絵版画の歴史や技法について学びながら多色刷りの木版画を制作し、伝統木版画の魅力を再発見する機会となりました。

春休み親子ワークショップ 絵本と美術の世界を楽しもう！

講　師：藤田百合さん（女子美術大学講師）
開催日：平成27年3月21日、22日
会　場：多目的スタジオ

幼児から小学校低学年を対象としたワークショップ。午前は、布に綿をつめこんで、大きなカブを親子で制作。午後は、大きな紙に川と描き、それをみんなで並べてひとつの大きな川にしました。描いた魚や川は、美術館内に展示しました。

対談「再発見、明治工芸の粋」

講　師：村田理如さん（清水三年坂美術館長）
　　山下裕二さん（明治学院大学教授）
開催日：平成27年4月29日
会　場：多目的スタジオ

「超絶技巧！　明治工芸の粋」は清水三年坂美術館の所蔵品で構成されています。この対談では、その村田館長と展覧会監修者である山下さんとの対談で、出品作の見どころの他、コレクションする際の裏話などもご披露いただきました。

第14回風土記の丘の美術展
郡山市内の小学生による展覧会

会期：7月20日(月・祝)～8月23日(日)
主催：郡山市立美術館・
　郡山市小学校造形教育研究会
会場：展示ロビー
　市内を5つの地域に分けて、週替わりで展示します。展覧会とあわせてお楽しみください。
第1期　7月20日(月・祝)～26日(日)
　日和田、高倉、行健、行健第二、明健、小泉、行徳、富田、富田東、高野、鬼生田、三町目、大田、根木屋
第2期　7月28日(火)～8月2日(日)
　柴宮、穂積、三和、多田野、多田野堀口分校、河内、開成、薫、大槻、大成、朝日が丘、ザベリオ学園
第3期　8月4日(火)～9日(日)
　金透、芳山、芳賀、桃見台、赤木、白岩、東芳、大島、緑ヶ丘第一、宮城、海老根、御舘、御舘下枝分校
第4期　8月11日(火)～16日(日)
　片平、喜久田、熱海、熱海石筵分校、安子島、上伊豆島、湖南、富田西、桑野、小山田
第5期　8月18日(火)～23日(日)
　安積第一、安積第二、安積第三、永盛、守山、御代田、高瀬、谷田川、田母神、栃山神、橘、小原田、桜

【夏休み公開ワークショップ】
第10回風土記の丘発
図工&美術の時間へようこそ！

小中学校の先生と一緒に、図工と美術の授業を体験。いろいろなテーマのコーナーでお待ちしています。
日時：8月1日(土)
　午前の部　11時～正午
　午後の部　2時～3時
講師：郡山市内の小中学校の先生
会場：多目的スタジオなど
定員：各コーナーとも先着15名程度。
※予約はいりません。

常設展示

■～7月26日(日)
展示室1　銅版画で見るイギリスの風景
展示室2　明治の絵画
　―画家たちの挑戦―
展示室3　抽象絵画を楽しむ
展示室4　美しい本の世界／暮らしを彩る

■7月29日(水)～10月12日(月・祝)
展示室1　水彩画の魅力
展示室2　人を描く
展示室3　現代美術を楽しむ
展示室4　ホイッスラーとその追随者たち／新収蔵品：佐藤潤四郎のデッサン

※7月28日(火)は、展示替えのため常設展示室はご覧になれません。

●参加者募集●

○ワークショップ（内容は3頁参照）

・**季節を染める ―葛―**
講師：佐治ゆかり（当館館長）
日時：7月5日(日)午前10時～
会場：創作スタジオ
定員：15名程度
材料費：3000円
申込方法：6月28日(日)まで電話申込
　※応募多数の場合抽選

・**野外彫刻を作ろう**
講師：関根秀樹さん（和光大学講師・古代技術・民族文化史研究家）
日時：7月18日(土)午前10時～
開場：創作スタジオ
定員：小学生以上20名
　（小学生は保護者同伴）
申込方法：7月5日(日)まで電話申込
　※応募多数の場合抽選

・**民族楽器とサウンドオブジェを作ろう**
講師：関根秀樹さん
日時：8月9日(日)午前10時～
定員：小学生以上20名
　（小学生は保護者同伴）
申込方法：7月25日(土)まで電話申込
　※応募多数の場合抽選

〈アート・テーク〉

4年目を迎えた<アート・テーク>。文字通り「アートを捉える」、さらに「アートから捉える」ことを目的とした年6回の文化講座です。いずれも無料です。

平成26年度第4回アート・テーク報告
人形（ひとがた）　文楽の魅力

講　師：桐竹勘十郎さん、吉田玉誉さん、
　　桐竹勘次郎さん（人形遣い）
　　豊竹芳穂大夫さん（大夫）、鶴澤清馗さん（三味線）
開催日：平成26年11月30日　会場：多目的スタジオ

大夫が語る義太夫、太棹の響き、そして三人で遣う人形の高度な表現力で生まれる芸能、人形浄瑠璃文楽の魅力を、当代きっての人形遣い・桐竹勘十郎さんらに実演を交えて講義していただきました。

平成27年度の予定

第2回「異界を語る琵琶の音色」
講師：塩高和之さん（琵琶奏者）
日時：7月26日(日)　午後2時～
会場：多目的スタジオ
定員：150名
申込方法：7月12日(日)(必着)までに①住所、②氏名、③電話番号、④参加人数（2人まで）、⑤参加者の年齢と性別を記入し、ハガキまたはファックス、Eメール(bijutsukan@city.koriyama.fukushima.jp)で、件名は「アート・テーク応募」宛へ。※応募者多数の場合は抽選。

塩高和之さん

第3回「衣と〈後ろの世界〉」
講師：佐治ゆかり（当館館長）
日時：9月26日(土)　午後2時～
会場：講義室（申込不要）

昨年の「第9回風土記の丘発　図工＆美術の時間へようこそ！」会場

TOPICS

美術館のカフェ　juju 130 cafe
（ジュジュ　イチサンマル　カフェ）

フローズンラテ新登場（550円）！

6月から新登場するひんやり冷たいフローズンドリンク。
マイルドな甘さのキャラメル（右図）、コク深いチョコレートテイストのモカ、黒蜜をトッピングした抹茶の3種類。
これからの暑い季節に、氷をクラッシュしたシャリシャリ食感をお楽しみください。

営業時間　11：00～17：00
電　　話　024-942-2250

郡山市立美術館
Koriyama City Museum of Art
〒963-0666　福島県郡山市安原町字大谷地130-2
電話 024-956-2200　ファックス 024-956-2350
http://www.city.koriyama.fukushima.jp/bijyutukan/

ミックス
責任ある木質資源を使用した紙
FSC® C011278
VEGETABLE OIL INK
紙へリサイクル可
この印刷物は、適切に育まれた森から生まれたFSC認証紙と、環境にやさしい植物油インキを使用しています。